企画力の人

久保田　正人

椎名さんと私は同郷である。が、そのことと同僚であることとは関係がない。同郷と言っても、広い地域であり、椎名さんは上の方の地域、私は下の方の地域である。椎名さんの通っていた学校は山手にあり、私が通っていた学校はハスの田んぼの中をとおっている道の先にあった。が、そのことと同僚であることとは関係がない。椎名さんは私の幼なじみと同名であった。いつだったか、中華街のおいしいお店を紹介してもらったこともある（四五六菜館だったと思う）。が、そういうことと同僚であることとは、まったく、関係がない。

訳の分からない書き出しになったが、要するに、同僚であるという以外、ほとんど共通点がないのである。これは同僚としてじつに良い条件であった。なまじ、共通点が多いと、同僚としては好ましくないからである。

さて、ここからが「企画力の人」の話である。

いまはなき外国語センター当時、椎名さんはかなり長い期間、将来構想委員会の委員長であった。将来構想委員会は外国語センターという組織にとって最も重要な計画を立案・検討する委員会であった。当時の素人センター長のもと、斬新な計画を次々に立案し、それが外国語センターの立案・企画力と実行力を内外に知らしめることになった。千葉大学の外国語教育は、大学評価・学位授与機構から「特に優れている」という最高の評価を得たのである。その功績に力あった中心人物の一人が椎名さんであった。

当時の素人センター長は何事もこぢんまりまとめようとする性格であり、そのため、天馬空を行く椎名さんの企画力についてゆけず、さまざまな計画の縮小を図ったが、けっきょく椎名さんの企画をほとんど取り入れた案で行くことになった。そして、結果は、素人センター長がしぶしぶ残した部分が高い評価を得たこと、一再ならずであった。

同僚は好き嫌いで付き合ってはいけないのである。同じ目標の実現を目指す同志であり、自分にない優れたものを持っているならば、素直に、認めなければならない。やはり椎名さんは力のある人だったのである。椎名さん、これまでありがとうございました。これからもお元気で。

わが日の本は島国よ
朝日輝ふ海に
連り峙つ島々なれば
あらゆる国より船こそ通へ